

『西遊記雜劇』における華光と大権

二階堂 善 弘

On Hua-guang (華光) and Da-quan (大権) in “*Xiyouji Zaju* (西遊記雜劇)”

NIKAIDO Yoshihiro

In *Xiyouji Zaju*, written in the early Ming Dynasty, both Hua-guang and Da-quan play active roles on the same stage. In a sense, it is safe to say that *Xiyouji Zaju* is the only piece of literature in which these two gods appear together. This paper analyzes the characteristics of these two gods by examining how Hua-guang and Da-quan were depicted in *Xiyouji Zaju*.

キーワード：華光大帝、大権修利、伽藍神、『西遊記』

一 華光と大権修利

日本の禪宗寺院において、共に伽藍神として祀られる華光大帝と招宝七郎大権修利は、それぞれその渡来した時期が異なっている。招宝七郎大権修利は鎌倉から室町期に日本に渡来し、曹洞宗の寺院を中心に伽藍神とされる。華光大帝は江戸時代の初期に渡来し、主に黄檗宗の寺院において祀られている。

ただ、その伽藍神という職種から両者を混同することも多い。世田谷の豪徳寺では「大権」と称して華光大帝を祀っているし、福井の永平寺では両者を共に祀るが、大権修利はともかく華光大帝については、これを「土地伽藍」としてしか意識していない。

この両者はその信仰が発展し衰微した時期もいささか異なっている。大権修利は宋代にその信仰が発展し、明代には衰亡したものと考えられる。華光の方は、宋代から明代にかけてその信仰は隆盛を極め、清代に衰えたものと推察される。

そのため、華光信仰は福建をはじめとする各地域で残っているのに対し、大権信仰は中国本土では跡形も無いほど消え去ってしまっている。通俗文学においても、華光は『南遊記』や『北遊記』などの各所にその姿が見えるのに対し、大権修利はほとんど記載が無く、『水滸伝』に僅かにその名を留める程度である。

しかし、『西遊記』物語の古い姿を反映する明初の『西遊記雜劇』においては、珍しく両者が同じ舞台上で活躍している。ある意味では、両者が共に登場する唯一の資料であると言っても過言では無いであろ

う。ここでは『西遊記雑劇』に見える華光と大権の描写を見ることによって、両神格の性格について分析したい。

二 『西遊記雑劇』について

『西遊記雑劇』については、すでに『西遊記』研究においてその重要さは指摘されており、内容に関する分析はかなり進んでいると言えよう。特に日本では、太田辰夫氏と磯部彰氏により、その来歴についてはほぼ明確になっている¹⁾。ここでは、磯部彰氏の論考に拠りつつ紹介する²⁾。

『楊東萊先生批評西遊記』(略)は、『伝奇四十種』という戯曲叢書に収められ、現在、宮内庁書陵部に所蔵される。かつては、西国地方の雄藩萩藩の一支藩である徳山毛利家に伝来した貴重な劇本であり、中国には伝存しない。(略)楊劇西遊記は、発見当初より海内の孤本として注目を集め、先賢諸士によって研究がなされた。中国では孫楷第氏の詳細な研究が、楊劇西遊記研究の口火を切った。孫楷第氏は、天一閣旧蔵藍格鈔本『録鬼簿続編』の記載から、楊劇西遊記の作者が呉昌齡ではなく楊景賢であることを明らかにし、(略)そして、楊景賢の生存期間から推定して、楊劇西遊記の成書を永楽年間までとしたのであった。(略)わが国では、様々な角度から『西遊記』を研究した太田辰夫氏が、孫楷第氏をはじめとする諸氏の学説を再検討し、以下のように結論づけた。現在伝わる楊劇西遊記の刊行は、王世貞の歿年から『元曲選』の刊行時期の間にあり、その内容は刊行年代当時に存在していた『西遊記』の内容よりも古い時期の姿を留めている。だが、楊劇西遊記全体は、孫楷第氏が述べるような楊景賢の原作のままとは考えられず、楊東萊なる人物の加筆がなされているであろう、と。

すなわち、同書の本来の題名は『楊東萊先生批評西遊記』であり、宮内庁書陵部に蔵されることで知られている。この戯曲は一時、元の呉昌齡の作と考えられていたが、実は元末明初の人である楊景賢が作った戯曲である。ただしその内容は、元末から明にかけての改編を受けているであろうとのことである。本論で『西遊記雑劇』と称した場合、この楊景賢作、楊東萊改編になる雑劇を指すものとする。なお、本論では中華書局『元曲選外篇』に収録されたものをテキストとして使用した³⁾。

その作者の楊景賢については、これも中国を中心に多くの研究がある⁴⁾。いま金小平氏の論に拠れば、

-
- 1) 太田辰夫『「西遊記」の研究』(研文出版1984年)112~138頁、磯部彰『「西遊記」形成史の研究』(創文社1993年)301~337頁。
 - 2) 前掲磯部彰『「西遊記」形成史の研究』301~303頁。
 - 3) 隋樹森編『元曲選外編』(中華書局1980年版)633~694頁。
 - 4) 例えば、馬冀「楊景賢生平考索」(『黒龍江民族叢刊』2003年6期)75~81頁、金小平「論楊景賢在中国文学史上的地位」(『金華職業技術学院学報』8巻1期2008年)25~29頁、張大新「楊景賢『西遊記』雑劇之再認識」(『南陽師範学院学報(社会科学版)』2巻1期2003年)72~77頁などがある。

次の通りである⁵⁾。

これまでの研究と考証に拠れば、楊景賢は元の至正五（1345）年に生まれ、明の永楽十八（1421）年に亡くなった。モンゴル族の人である。はじめ名を楊暹とあったが、後に改めて楊訥とした。号は汝齋である。（略）彼の故郷はモンゴル高原のはずであるが、モンゴル人としての名前は分からない。幼年或いは少年にして錢塘（杭州）に移った。姉の夫である楊鎮撫と共におり、そのために楊姓を称した。（略）彼の文名は南京にまで及び、当時の名士である賈仲名や湯舜民と交流を持つこととなった。（略）洪武年間、彼は杭州と南京の間を往来していたが、その文章は燕王の朱棣から賞された。後に燕王が帝位に登った後、楊景賢は召されて宮中に入ったこともあるが、その出自や彼自身の性格から、政治に興味はなく、文芸の道に戻っていった。彼の活動はほぼ杭州と南京の間にあり、最終的には南京において卒した。

楊景賢の出身がモンゴル族であることは興味深いが、ここで問題にしたいのは、その活動した地域である。

彼の活動地域は、モンゴルでの幼少期、それに永楽帝の知遇を得た一時期を除いては、ほとんど杭州から南京の間に限られている。恐らく、楊景賢はこの地域において信仰されている神々をその創作の中に取りこんだものと推察される。寧波を中心とする浙江地域で信仰された大権修利、それにかつて杭州から安徽地方にまで広く信仰されていた華光大帝がこの『西遊記雜劇』に登場するのは、まさにこういった事情を背景にしたものと思われる。

逆に言えば、例えば北方地域で書かれた『西遊記』系統の作品であれば、華光や大権が登場することは無いと推察される。

実際に、明の小説『西遊記』においては、大権修利は一切登場しないし、また華光大帝もごく一部にその名が見える程度である⁶⁾。

長老至前見是一座倒塌的牌坊、坊上有一旧扁。扁上有落顏色積塵的四個大字、乃華光行院。長老下了馬、道、華光菩薩是火焰五光仏の徒弟、因剿除毒火鬼王、降了職、化做五顯靈官、此間必有廟祝。遂一齊進去。

ここでは、三蔵法師が華光について語り、「華光菩薩は火焰五光仏の徒弟であったが、毒火鬼王を滅ぼした罪により、職を降され、五顯靈官という神となったのだ」と述べている。この他ではほとんど華光の名を見ることは無い。

ただ、華光は道教四大元帥の一つであるため、馬元帥としての華光は他の箇所にも何度か登場している。或いは、小説『西遊記』においては、華光と馬元帥を別の神格と見なしているか、それとも馬元帥

5) 前掲金小平「論楊景賢在中国文学史上的地位」25頁。

6) 『李卓吾評本西遊記』（上海古籍出版社1994年）1295頁。

が四大元帥として天界を守護しているために、三蔵を保護する役割からははずれたものか、その意図については不明確である。

ある意味では、華光と大権が登場することが、『西遊記雑劇』の地域性を示すものと言えよう。

三 大権修利の役割

『西遊記雑劇』においては、華光も大権修利も、まず三蔵法師玄奘を守護する「十大保官」として、観音菩薩から任命される⁷⁾。

第一箇保官是老僧、第二箇保官李天王、第三箇保官那吒三太子、第四箇保官灌口二郎、第五箇保官九曜星辰、第六箇保官華光天王、第七箇保官木叉行者、第八箇保官韋馱天尊、第九箇保官火龍太子、第十箇保官迴來大権修利。

李天王や哪吒太子、二郎神や木叉などは、明の小説『西遊記』でも活躍する神々である。第六の保官に華光大帝が、第十の保官に大権修利が任命されるが、華光はともかく、大権がこれほど重視されているのは他に例を見ない。

その大権修利が登場するのは、三蔵一行が天竺に到着し、お経を釈迦如来から拝受する場面においてである。

三蔵一行が天竺の靈鷲山に到着すると、まず給孤長者が現れて玄奘を迎える。玄奘は礼を述べる。次に出てくるのは寒山・捨得の二者である。祇園精舎で有名な給孤長者はともかく、なぜここで寒山と捨得が登場するのかが不明である。そして彼らに続いて、大権修利が登場する⁸⁾。

小聖大権修利菩薩。奉我仏法旨、看守金剛大蔵。為金光燦眼、常手掌護之、凡人称我為招提。今日仏法要東行、着毗盧伽尊者、托化為陳玄奘、自東來西取経、今日敢待來也。

まず大権は自分のことについて、「金剛の大蔵を守護しているが、金光が輝くために、手のひらでこれを覆っている。人は我を招提と称している」と述べ、次に玄奘三蔵の前世が「毗盧伽尊者」であることを告げる。大権修利は、すなわち片手を差し上げる姿が有名であるが、ここでは経典が光り輝くために、手を差し上げて守護するのだと言っている。次に大権は玄奘に経典を授けて、このように述べる⁹⁾。

玄奘、我仏法旨、経文到处、着我随所守護、沿路上我当保障你直到中原、諸寺但有経蔵処、即有小聖。経蔵吾神有大権、守経護法到中原。有経蔵処休無我、永受香煙万万年。

7) 前掲『元曲選外編』652頁。

8) 前掲『元曲選外編』690頁。

9) 前掲『元曲選外編』691頁。

「経典のあるところ、必ず大権修利があってこれを守護する」と言う。現在、寧波の阿育王寺の舍利殿にある大権修利菩薩の像がこの姿に近いかもしれない。この直後、天竺で孫行者・沙和尚・猪八戒の三名の弟子は、三蔵法師に別れを告げる。『西遊記雜劇』では、玄奘が唐に戻るとき、この三名は同行しない設定になっている。

なお、太田辰夫氏は大権について、次のような分析を行っている¹⁰⁾。

またここで迴来大権（大権修利菩薩）が玄奘に経文をわたす役をする。この大権修利菩薩の像は現在わが国でも曹洞宗の寺院にみられるが、もとは寧波の阿育王山の護神で、手を額にかざし、海上を望見しているという。迴来とは航海する船が安全に帰来するという意味から出たのかも知れないが、ことによると飛来の訛りであるかともおもわれる。天竺より飛来したという伝説もあるからである（客家方言では、回・飛が同音）。

太田氏のこの重要な指摘について、筆者はうかつにも失念していた。ただ「迴来」の意味については、むしろ招宝七郎との関連で、やはり「帰来」の意味が強いのかと考える。

ただ憶測を逞しくすれば、ここで大権修利が「招提」と呼ばれているのは注意したい。この語は『望月仏教大辞典』の解説によれば、四方の僧を招くことであるとされる。日本では奈良の「唐招提寺」の称が有名であるが、やはり招き入れる意が強いのであろう。実は招宝七郎と大権修利との結びつきについては、いまだに不明確な点が多い。両者の共通点と言えば、すなわち片手を差し出すその形象であるが、これもどちらがどちらに影響を与えたのかは判然としない。或いはこの「招提」が「招宝」と混同される可能性もあったのではないかと考える。

四 華光大帝の登場場面

華光大帝が登場する場面は、一つの場面をほとんど独占しているが、その書かれた意図が今ひとつ不明確である。

先に見たとおり、観音菩薩が三蔵法師を守護する役割を「十大保官」に与える。そして彼らを任命しようとするところ、華光がそれに遅れて現れ、そして延々と自分のことについて述べるのである¹¹⁾。

釈道流中立正神、降魔護法独為尊。驅馳火部三千万、正按南方位丙丁。某乃仏中上善、天下正神。観音仏相請、須索走一遭。(略)【滾繡球】宣靈王將火部驅、胡総管將火律掌、火鴉鳴振驚天上、火瓢傾卒律律四遠光茫。火丹袖五百、火輪踏一双、火葫蘆緊縛師曠、使離妻拖定金鎗。神中号作華光蔵、仏会稱為妙吉祥、正受天王。【倘秀才】玉皇殿金磚是我蔵、后土祠瓊花是我賞、炒鬧起天宮這一場。鎗撞番四揭帝、磚打倒八金剛、衆神祇索納降。【滾繡球】上天宮鬧玉皇、下人間保帝王、保得他

10) 前掲太田辰夫『「西遊記」の研究』132頁。

11) 前掲『元曲選外編』652～653頁。

国無災庶民無恙、因此上感威靈歲歲燒香。我將那五嶽欺、五氣掌、五瘟神遣之於天霄、五音中徵為偏長。五星中讓我在南天上坐、五方內將咱離位藏、誰不知五顯高強。

要するに華光が登場して、自分のことを延々と歌って、最終的に依頼を引き受けて終わりという場面である。しかも、この後の肝心の三蔵守護については、ほとんど華光には活躍の場が無い。

なおここで華光が述べる自身の来歴は、むしろ『三教搜神大全』の馬元帥などの記載に近いものがある。ただ異なる面もある。

「火部の部下が三千万」「火鴉」「火瓢」などと火の神であることを述べる。火輪に乗るのはむろん他の資料にも見えるものである。また「仏教と道教の中間にあり」と言い、「神としては華光蔵、仏教では妙吉祥と称す」と仏教でも道教でも通用する神であることを強調する。さらに、五顯神との結びつきも書かれている。「華光蔵」と称するのも興味深い。

この場面は、やはり当時の杭州一帯での華光大帝の存在感を示すものであろう。楊景賢からすれば、『西遊記』物語の中に華光が登場しないことは考えられなかったのであろう。一方で、楊景賢が基づいた資料には、ほとんど華光の活躍する場が無かったのではないか。そのためにこの場面をわざわざ華光のために用意したのではないかと推察する。これは現在の杭州一帯の状況からは考えられないことであるが。

五 挿絵について

『西遊記雑劇』には、非常に質の高い挿絵が付されていることでも知られている。幸いに瀧本弘之氏の編による『中国古典文学挿画集成（二）』に『西遊記』関連の挿絵が収録されており、その様子をうかがうことができる¹²⁾。

まず華光の登場場面であるが、華光は甲冑姿で三目であり、かつ白蛇の金鎗を持っている。また手前に火輪が置かれており、馬元帥としての華光の姿に近い。ただ、この絵では有髯になっている。一般的に華光は無髯で描かれるので、珍しい。

次に大権修利であるが、恐らく天竺の場面で玄奘三蔵の隣にいるのが大権修利であろうと推察されるが、該当する挿絵は二種類あり、どちらが大権であるか分からない。

一つめは上部に寒山・拾得が描かれ、その下に玄奘ともう一人の人物があるものである。これは戯曲の上では、給孤長者か大権修利のどちらかであると考えられるが、そのどちらであるのかは判然としない。

もう一方の絵は、ほぼ同じような構図であるが、釈迦如来の前にある玄奘三蔵ともう一人である。こちらも給孤長者か大権修利のどちらとも考えられる。

ただ、見た限りでは前者の絵が老齢に見えるので、いまは仮にこちらを給孤長者、後者の絵を大権としておきたい。

12) 瀧本弘之編『中国古典文学挿画集成（二）西遊記』（遊子館2000年）



華光大帝（『中国古典文学插画集成（二）』117頁）



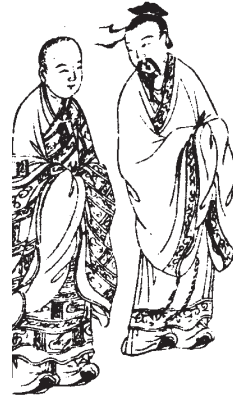
寒山・拾得と三蔵と給孤長者？大権？

（『中国古典文学插画集成（二）』145頁）

なお、本論の趣旨からは逸れるが、この雑劇に付す絵のうち、釈迦如来と四金剛を描いた絵は重要なものであると考える。

この絵に見られる四金剛は、琵琶や傘、それに剣を持っている。あとの一体については絵に消えている部分があるため確認しにくい、恐らく蛇を持っているものと推察される。

中国の四天王が、何時から琵琶・傘・蛇・剣という持ち物になったのかについては、以前に考察を行ったが、『封神演義』以外に明確にそれに近い姿を描いたのは少ない¹³⁾。この絵はその少ないものの貴重な一つであると考えられる。



三蔵と給孤長者?大権?
(『中国古典文学挿画集成 (二)』149頁)



釈迦如来と四金剛
(『中国古典文学挿画集成 (二)』
148頁)

ただ、劇中においては、これを「四天王」と称せずして「四金剛」とする。これは金剛神であるのか、それともイコール四天王と見なしてよいのかは、まだ判断の余地があると思うので、ここではあくまで四金剛とするにとどめたい。

13) 筆者『明清期における武神と神仙の発展』(関西大学出版部2009年) 155~171頁。